新見公立短期大学紀要　第23巻
pp. 25－33, 2002

論　稿

子どもの心の育ちと保育者のかかわり(1)
－0歳児の自然とのかかわりを中心に－

高月　教恵　　大村　久子*
山縣　弘子**　　原瀬　生子***

保育方法学

Children's Emotional Development and Childcare Givers' Interactions (1)
－Focusing on Relations of Children in Under-one-year-old Class with Nature－

Norie TAKATSUKI　Hisako OMURA
Hiroko YAMAGATA　Ikuko HARASE

(2002年11月1日受理)

自然とかかわっている場面での0歳児A男とH子の一年間の行動観察記録を中心に考察した結果、0歳児A男とH子の心の育ちは、小動物を怖がったり興味関心のなかった自然に興味関心をもち始め、言葉で名称を表現できるようになり、名称を言いながら感動や喜びを表現できるようになったことと考えられる。その心の育ちは“保育者に誘われて自然にかかわること”が大きなきっかけになっていると考えられる。そして子どもの心の育ちへの保育者のかかわりとしては、“環境構成”と“いっしょに自然にかかわる”という保育者自身が子どもの生活を誘導していくことが重要なポイントになると指摘できるのではないかと考えられる。

はじめに

幼稚園教育要領の第1章総則2幼稚園教育の目標に、「幼稚園教育の基本に基づいて展開される幼稚園生活を通して、生きる力の基礎を育成する」とある。生きる力については、中央教育審議会答申（平成8年7月）で「“生きる力”とは、“いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力”、“自ら律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性”、そして、“たくましく生きるための健康や体力”」と定義されている。さらに幼稚園教育要領第2章ねらい及び内容に、「ねらいは幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度であり…」とある。そして保育所保育指針第1章総則2保育の内容構成の基本方針(1)ねらい及び内容に、「ねらいは子どもが保育所において安定した生活と充実した活動ができるようにするために保育士が行わなければならない事項及び子どもの自発的、主体的な活動を保育士が援助することにより、子どもが身につけることが望まれる心情、意欲、態度などを示した事項である」と記載されている。以上のことから、幼稚園教育・保育所保育におけるねらいは、生きる力つまり心

*敬親保育園　**美川幼稚園　***矢掛保育園

情・意欲・態度等を育てることと言えよう。筆者は、子どもの生きる力を育てることに視点をおき、先の研究[1]で主体性（意欲）を中心に研究した。本稿では、心の育ちを中心に考察を進めたいと思う。

心については、広辞苑では「心とは、人間の精神作用のもとになるもの。また、その作用。①知識・感情・意志の総体。“からだ”に対するもの。②思慮。おもわく。③気持。心持。④思いやり。なさけ。⑤情趣を解する感性」[2]とある。また河合隼雄は「心的機能とは、種々異なった条件のもとにおいても、原則的には不変な心の活動形式であって、ユングはこれを四つの根本機能、すなわち、思考（thinking）、感情（feeling）、感覚（sensation）、直感（intuition）に区別して考えた」[3]と言っている。さらに、幼稚園教育要領・保育所保育指針から、「心情」とは生きる力の定義の「自分を律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性のもとになっていると考えられるもの」と言えよう。これらのことから、「心」とは、「思考・感情・感覚・直感の働きをもっているものであり、その働きに基づいて、自分を律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性のもとになっていると考えられるもの」と、とりあえず定義づけることにする。

本稿では、自然とかかわっている０歳児Ａ男（11ヶ月）とＨ子（11ヶ月）の行動観察記録を中心に、子どもの心の育ちと保育者のかかわりについて考察をする。

１．研究の目的と方法

(1)　研究の目的

日々の保育のなかで自然とかかわっている子どもの様子を、保育者が実践指導する中で観察した記録に基づいて、自然とかかわることによって子どもの心の何が育ち、その育ちに保育者はどのようにかかわればよいかについて考察する。

(2)　研究の方法

保育者（担任）が子どもと共に生活する中で観察する自然観察法である。

①場所　浅口郡Ｋ保育園（０歳児１クラス５名、１歳児１クラス16名、２歳児１クラス16名、３歳児１クラス14名、４・５歳児混合クラス23名、職員数16名）
小田郡Ｙ保育園（０・１歳児混合クラス11名、２歳児１クラス14名、３歳児１クラス39名、４歳児１クラス42名、５歳児１クラス25名、職員数14名）

②対象　Ｋ保育園０歳児クラスＡ男（平成11年４月11日生）
Ｙ保育園０歳児クラスＨ子（平成11年４月28日生）

③観 察 者　担任保育士

④観察期間　平成12年４月～平成13年３月

⑤観察場面　自然とかかわっている場面での子どもの様子

⑥記録整理の方法　毎月一回、筆者を含む岡山県井笠三郡13保育園の代表保育士（観察者）で研究会をもち、13園から出された観察記録に基づいて検討を行い、子どもの心の育ちと保育者のかかわり（環境構成・保育者の態度・言葉がけ）について整理する。

２．研究の結果と考察

(1)　Ａ男の場合

①入園当初のＡ男

Ａ男（11ヶ月）は、父・母・兄（３歳３ヶ月・３歳児クラス）・本人の４人家族であり、国道２号線近くのコープに住んでいる。同じコープに、２歳児クラスの同保育園児も住んでいる。４月（生後11ヶ月）よりＫ保育園０歳児クラスに入園し、兄といっしょに通園している。

入園当初のＡ男は、伝い歩き、つかまり立ちができるが、いつも保育者に抱かれ、抱いてもらえないと泣いて鼻水を流し、午前中は眠ることが多い。保育者が部屋にいる金魚を見せたり餌をいっしょにやったりするが、ぐずって金魚にかかわろうとしない。このことから、なかなか園生活に慣れず、金魚に興味関心を示さない態度が窺える。

②Ａ男の一年間の育ちと保育者のかかわり

記録１　Ａ男の一年間の育ちと保育者のかかわり

	Ａ男の姿	保育者のかかわり
4月	水槽を覗き込む。 カメが動き出すと声をあげて喜ぶ。小さいカメを平気で触る。「ブップー」と言ってカメと遊ぶ。小さいカメを投げる。大きいカメを取り出して「ブップー」と言ってカメと遊ぶ。大きいカメを先生に渡す。 小さいカメをケースに落とす(入れようとするが、ケースが高いので落とした状態になる。大きいカメをケースに入れる。	大小２匹の入ったケース(21×36×24)を年長組クラスより借りて、床の上に置く。 子ども達みんながよく見えるように、ケースから２匹のカメを出して見せる。 「Ａ君、カメさんかわいそう」と言う。 「ありがとう、大きいカメさんも入れてあげて」と言って見守る。 子ども達の興味がなくなったので、カメをケースに戻し子ども達一人一人の手を石鹸で洗う。
5月	寝起きで泣いたいたが、幼虫をじっと見る。 虫が背中でクネクネ這うのを見て泣き始め、虫が近づいて来ると大泣きする。 ケースの中をじっと見る。	園庭で子ども達と遊んでいる時、砂場の中で幼虫を見つけ、ケース(13×22×13)に入れて０歳児クラスに持って帰る。「お外でこれ見つけたよ。何の幼虫かな」と言って幼虫を見せる。 幼虫を床に置く。 「ケースの中に入れてやろうかな」と言って、幼虫をケースに入れる。
6月	眠くてずっと泣いていたが、取っ手を少し持ち上げ、床に落とす。びっくりして保育者に助けを求める。 「カエル」を指さす。 泣き声を出しながら、蓋をしめるようにと態度で表す。 緑のカエルを指差さ。カエルよりケースの開閉に興味を示し始め、開け閉めする。 指さしてにこにこする。 スズムシを指さしながら少し後ずさりする。 Ｓ子をたたく。 キュウリを取って、にこにこしながら「アッ」「アーアッアッ」と言う。	カエルの入ったケースを(13.5×21×16)を年長児クラスより借りて、床に置く。「何かいる？」「カエルさんがおるよ。」「見える」「動いたよ」と話しかける。 「どこにおるん？」と聞く。 「すごいなー」と指差しができたＡ男を褒める。 ケースの蓋を開けて「ピョンと飛び出るかな」と言う。 ケースの蓋を閉める。「緑のカエルは？」と聞く。 年長組に返す。 家からスズムシを持って来て、「スズムシの赤ちゃんいるよ」とケース(20×33×24)を見せる。 「スズムシの赤ちゃんホラ動いたよ」と言いながら、キュウリのついているスズムシを取り出して見せる。 Ｓ子がケースに玩具を入れようとするので、「ダメダメ」と注意する。 スズムシのついたキュウリを持たせる。 飽きたので、ケースをみんなの見える所に置く。
7月	保育者の傍に寄って来て、不思議そうに見る。 「アッ」「アーアッアッ」と言いながら、サナギを指さす。座り込んでじっと見る。 不思議そうな顔をして、じわじわそばへ寄って来てセミをじっと見る。 びっくりして、「ウワッー」と言って払い除ける。 ホッとする反面また気になりセミを見る。セミを指差したり突ついたりする。	「みんな見て、カブトムシさんよ」と言って、幼虫から育てたカブトムシのサナギを見せる。 「こんな形をしているよ」「手で触ったらだめよ」「大きくなるといいね」と言う。 サナギに触ると、死ぬかもしれないのでケース(21×36×24)にしまう。 １歳児クラスの子どもが服に熊ゼミをつけて登園して来たのを見て、「みんな来てセミさんよ!クマゼミよ!みんなおいで」と誘う。 「セミさんお洋服につけてあげようか」と言って服につける。 「Ａくんセミさん怖いん?怖いけど見たいん?」と言葉をかける。 「お友達に返しておこうな」と言って返す。
8月	外を指さす。 ヒマワリを指さし「アーアー」と応える。 保育者に抱っこしてもらって、ヒマワリの迷路に入る。 「コー」「アァー」と応える。迷路の途中から泣いて保育者にしがみつく。	「散歩に行くよ」と誘って、クラスの子ども達を園近くのヒマワリの迷路畑に遊び心に連れて行く。 「ヒマワリが見えるよ」「いっぱいあるね」と話しかける。 「迷路に行ってみようか」と誘う。 「ヒマワリ背高のっぽだね」と言う。 「怖くないよ」と言って抱きしめる。 「みんな楽しかったね」と言って園に帰る。
9月	機嫌悪く泣いていたが、ケースを見ると泣きやめる。保育者の問いかけに、「ブーブー」と言って指さす。 カブトムシの様子をじっと見る。近づいてくると泣き出す、後退りする。少し離れた所(約１m)から指差して「コー」「ァゥー」「ァーァー」「クワァー」と言う。 カブトムシが近づくと怖いため、「牛乳パックで作った椅子の周りをウロウロする。 保育者の肩をたたき「これ」「バァー」と言うが、カブトムシが傍に寄って来ると滑り台の上に逃げる。 ケースをじっと見る。	幼虫から育てたカブトムシの雄１匹・雌３匹を見せて、「何かな?」と問いかける。 カブトムシをケースから出して床に出す。 「Ａくんカブトムシ」「あっちから来たよ」「どこに行ったかな」「ヨーイドンしているよ」と話しかける。 「Ａくんいろうてごらん」と誘う。 ケースを片付ける。
10月	馬の乗り物に興味を示し保育者に目で訴え、馬に乗せてもらう。馬に乗ってまわると、コスモスの花が顔に当たるので降ろしてもらう。「アー」「オー」と言う。 「アイ」と言う。コスモスの花を触る。枯れかけた花びらを取る。 「いや」と言う。 「はな」「なーな」「これ」と言いながら次々と花びらを取る。 なくなると「ないない」と言う。手の届く花びらを取る。 歌を聞きながら、「なーなー」と歌う。	子ども達といっしょに２階の園庭に出る。 「そうよ、お花。コスモスと言うんよ」と教える。 きれいな花を指さしながら「ここのをとってごらん」と言う。 花びらを取って見せる。 取った花びらを集めて容器に入れる。 コモスの歌を歌う。
11月	「アー」と言って金魚を指差す。 バケツのまわりに友達が集まり押し合いになると、「もー」「いや」と言い、友達とけんかになる。一人ロッカーの所に走って行き、ロッカーをたたいたり押したりする。 傍に寄って来て金魚を見て「アッアー」と言う。きれいになった水槽(35×60×30)を指差して金魚がいないのに気付き「ないない」と言う。 「おった」と言い、ピョンピョン飛び跳ねて喜ぶ。しばらく金魚の様子を見る。	「金魚さんお水が汚くなったからかえようね」と言う。みんなの前にバケツを置き、金魚をバケツに入れる。 「みんな順番に見ようね。座ったら見えるよ」と誘う。水かえをする。 「金魚さん入れるよ。みんな見ていてよ」と言って、金魚を水槽にもどす。
12月	Ｈ子・Ｎ男がバケツに手を入れるのを遠くから見ている。 「いやいや」と言う。 Ｈ子・Ｎ男・Ｙ男・Ｒ子がバケツに手を入れて水遊びを始めたために、水がかかり泣く。 Ｈ子・Ｎ男・Ｙ男・Ｒ子が金魚を捕まえようとしたために、服に水がかかると大声で泣く。	「金魚さんの水かえるからね」と言う。 「見んの？」と誘う。 「Ａ君こっち来てみ。逃げなんなー」と言う。 服を着替えさせる。

1月	保育者の傍に寄って来て、ちらっと見る。 自分から歩いて広場に入る。「ワンワン」「ガーガー」と言う。 「ガーガーガー」と言って置物のアヒルを指差す。 みんなが触っている様子を見て、おそるおそる触って、二コッと笑う	近所のいこいの広場へ散歩に行く。 草むらを見て「あっお花がいっぱいだね」と言う。 広場に着く。「いこいの広場お花いっぱいだね」と言う。 「ガァーガァーどこにおるん」と尋ねる。 「お花に水がついとるよ。触ってごらん」と言って触ってみせる。
2月	「おあよう」と一人で言って、自分からスタスタと歩いて広場へ入る。 「ワンワン」「ガーガー」と言い、トコトコ歩く。 突然立ち止まる。 新しい犬や新しい小人の置物が増えていたのを見つけ、じっと見る。5分間程見続ける。	参観している親と一緒に、いこいの広場へ散歩に行く(参観習間のため全員参加ではない。A男の親不参加)。 「今日はお母さん達と一緒に遊ぼうね」と言って広場で遊ぶ。 「Aくんどうしたん?」
3月	友達が窓の方へ駆け寄るのを見て、駆け寄る。 雪の方を少し見るが、外で遊んでいる年中児が気になり、雪は見ない。 手や足を動かして踊るが、すぐ飽きてミニカーで遊ぶ。	遊戯室で遊んでいると、雪が降り出したので「雪が降っているよ」と言う。 「雪やこんこん」の歌を歌う。

A男の一年間の育ちをみると（記録1参照)、4月下旬では機嫌良く目覚めて保育者にカメを見せてもらい、カメが動き出すと声をあげて喜んだり、カメをミニカー扱いにして「ブッブー」と言って遊ぶ。このことから、カメを自動車と思っていると考えられる。5月では保育者に幼虫を見せてもらい、幼虫がクネクネすると泣き始め、幼虫が近づいて来ると大泣きする。6月では保育者にカエルの入ったケースを見せてもらい、保育者に「どこにおるん？」と尋ねられてカエルを指さす。しかし、保育者がケースの蓋を開けようとすると、泣き声を出しながら蓋を閉めるようにと態度で表す。また、保育者にスズムシの赤ちゃんを見せてもらい、指さしてにこにこする。保育者がスズムシのついているキュウリを取り出すと少し後退りをするが、保育者にスズムシのついているキュウリを持たせてもらうと、にこにこしながら「アッ」「アーアッアッ」と言う。7月では保育者にカブトムシのサナギを見せてもらい「アッ」「アーアッアッ」と言って指さし、座り込んでじっと見る。このことから、カエルや幼虫は動くのが怖いようであるが、スズムシの赤ちゃんはとても小さく動きが目立たないこと、またサナギは動かないので怖くないのであると思われる。8月では園近くのヒマワリの迷路畑に行き、ヒマワリに圧倒されて泣く。9月では幼虫から保育者が育てたカブトムシを見せてもらい、「ブーブー」と言って指さす。保育者がカブトムシをケースから出し、カブトムシが近寄ってくると泣き出す。少し離れた所から指さし、カブトムシが近寄ってくると逃げる。カメと同じように這って歩くものは車を連想させるようであるが、カメのようにミニカー扱いをしないことから、カブトムシには興味があるが、怖い様子も窺える。今まで園庭に咲いている花にはあまり興味を示さなかったが、10月ではコスモスの花を見て「はな」「なーな」「これ」と言って興味を示すようになる。11月では金魚の水かえの途中水槽を見て金魚がいないことに気付き、金魚が水槽に戻ると「おった」と言って飛び跳ねて喜ぶ。12月では保育者に金魚の水かえに誘われるが、友達がバケツに手を入れているのを見て嫌がる。そして水かえの水がかかると泣く。金魚には興味があるが、身近に触ったりすることに恐れている様子が窺われる。1月・2月では近くのいこいの広場に行き、自分からアヒルと犬の置物を見つけて「わんわん」「ガーガー」と言う。雪が降った3月では保育者に雪の歌を歌ってもらうがあまり興味を示さない。これは遊戯室から雪を見ていたためで、園庭で直接雪に触れていれば違っていたのではないかと思われる。

以上のことから、小動物を怖がっているA男であるが、怖がりながらも少しずつ興味を示し始め、心の育ちが窺える。また、花にも興味を示し始めている様子も窺える。そして、「アッ」「アーアッアッ」「アーアー」「はな」「なーな」「これ」「おった」「ワンワン」「ガーガー」と小動物や植物を言葉で表現できるようになってきている様子が窺える。

A男の一年間の育ちに保育者がどのようにかかわったかをみると、保育者はカメ・カエル・スズムシ・カブトムシのサナギ・幼虫から育てたカブトムシ・金魚を飼育し、室内に取り入れ、A男がかかわる機会を積極的にもっている様子が窺える。さらに、園外保育に行ってヒマワリや自然に

触れる機会をもっている様子も窺える。そして、保育者は小動物や植物や自然現象にA男といっしょにかかわりながら、誘導したり、見守ったり、怖くないことを教え、A男の気持を受け入れたり、名称を教えたりしていることがわかる。

(2) H子の場合

①4月当初のH子

H子（11ヶ月）は、父・母・本人の3人家族であり、平成12年3月にY保育園の地域に家を建てて他の地域から引っ越してきたばかりである。家の前には田畑があり、近所に同年齢の男の子がいる。4月（生後11ヶ月）よりY保育園0・1歳児混合クラスに入園している。

入園当初のH子は、あまり泣くこともなく園生活にすぐに慣れる。ヨチヨチ歩きではあるが立って歩くことができる。保育者がウサギやニワトリを見せると、じっと見ている。外に出ると土の上に座って土いじりをする。このことから、園生活には慣れているが、目新しい物に対してじっと見る傾向がある様子が窺える。

②H子の一年間の育ちと保育者のかかわり

H子の一年間の育ちをみると（記録2参照）、4月では保育者に虫がいるのを教えてもらい、じっと見ていて虫が近寄ってくると指でつぶす。5月では保育者にイチゴを見せてもらい、「アーアー」と言ってイチゴを指さし、保育者に「におう？」と言ってH子の前にイチゴの鉢を差し出されるとにおいを嗅ぐ。保育者と一緒にイチゴを摘むと食べようとし、止められる。おやつの時に、「マンマ、マンマ」と言ってイチゴを食べる。6月ではカエルやオタマジャクシやタニシの入ったケースを保育者に抱っこして見せてもらうが、関心を示さない。保育者の手に乗っているカエルを見て、ギョッとした様子で身をのけぞるが、カエルをじっと見て指さしながら触り、「マンマ、マンマ」と繰り返し言う。8月ではジョロやスプーンやフルイで水を汲んだり流したりを何度も繰り返し、水の流れ落ちる面白さや水をすくうことを楽しむ。9月では保育者にフウセンカズラの袋から種を出して手のひらにのせてもらい、じっと見る。A子に種を取られるが怒ることもなく、地面に落ちてもじっと見て他の方に行っている。このことから、フウセンカズラの種にはあまり関心のない様子が窺える。10月では保育者と一緒に二十日大根の種を蒔き、保育者と一緒に水やりをしている。11月では大きくなった二十日大根を抜き、抜いた大根を見てびっくりし「だいこん、だいこん」を繰り返して言っている。このことから、二十日大根を抜いたH子の感動が伝わってくる。12月では園外保育で近くの寺に行き、保育者からもらったイチョウの葉っぱをじっと見て「はっぱ」と言い、突然風が吹いてたくさんの葉が落ちるとじっと見ている。1月では保育者にヒヤシンスの花を見せてもらい「ヒヤシンスの花よ」と教えてもらうと「はな」と言い、保育者に「根っこよ」と教えてもらうと「ねっこ」と言う。2月では自分で大きな雲を見つけて「くもーくもー」と大きな声で言っていることから自分の驚きを言葉で表現し、保育者に伝えようとしている様子が窺える。3月では池に大きな鯉がたくさん泳いでいるのを見て、保育者がパチパチ手をたたくのを真似て、行ったり来たりしながら「こいさん、こいさん」と言い、手をたたいて喜ぶ姿が見られる。

以上のことから、じっと見ることの多いH子であるが、カエルに触ったり、二十日大根を抜いてびっくりし「だいこん、だいこん」と言って感動したり、大きな雲を見つけて「くもーくもー」と大きな声で保育者に伝えようとしたり、鯉を見て保育者のするのを真似て「こいさん、こいさん」と言いながら手をたたいて喜ぶ姿から、小動物や植物や自然現象に興味をもち、親しみをもち始めている育ちが窺える。また、「だいこん」「はっぱ」「はな」「ねっこ」「くもー」「おはな」「とんでいった」「こいさん」と小動物や植物や自然現象を言葉で表現できるようになってきている様子が窺える。

H子の一年間の育ちに保育者がどのようにかかわったかをみると、保育者はイチゴ・カエル・オタマジャクシ・タニシ・フウセンカズラ・二十日大根・ヒヤシンスを飼育栽培し、室内やテラスに取り入れ、積極的にH子がかかわる機会をもっている様子が窺える。さらに、園外保育に行ってイチョウや鯉や自然に触れる機会をもっている様子

高月　教恵・大村　久子・山縣　弘子・原瀬　生子

記録２　Ｈ子の一年間の育ちと保育者のかかわり

	Ｈ子の姿	保育者のかかわり
４月	虫の方を見る。虫が動くのをじっと見る。 虫が寄ってくると、突然指で虫をつぶす。 虫をじっと見ている。 水槽を覗き込む。	黒い１cm の虫をテラスで見つける。 指さして「虫、虫」と言う。 「動いているなぁ」と声かけをする。 思わず「あっ」と声が出る。 「動かんようになったなぁ」と言って、ティシュに包む。
５月	「アーアー」と言いながら、イチゴを指さす。 身を乗り出してイチゴのにおいを嗅ぐ。	外で栽培しているイチゴの鉢を室内の机の上に置く。「ほーらイチゴがなっているよ」と声をかける。 「赤いイチゴにおう？」と言ってＨ子の前にさし出し、Ｈ子の様子を見ながら「いいにおいじゃなぁ」と言う。
	保育者と一緒にイチゴを一つ摘む。 摘んだイチゴをじっと見て、食べようとする。 「マンマ、マンマ」と言って大きな口を開けて食べる。	イチゴの植木鉢を囲んでクラス全員の子どもを座らせる。「イチゴ赤くなったね」「赤いイチゴ採ろうね」と言って手を添えながらイチゴを摘む。 イチゴをた食べようとするのを止める。 おやつの時、摘んだイチゴをフルーツポンチの中に入れてもらう。 「おいしいな」と言っていっしょに食べる。
６月	「ケース」を覗く。 保育者の声を聞いても関心がなく、ブロックを持って遊んでいる。 ギョとした様子で身をのけぞるが、カエルをじっと見て、指差しながら触る。 「マンマ、マンマ」と繰り返し言う。 テラスの皿の中のオタマジャクシを見るが、興味がなく、抱っこをせがむ。	園外保育でカエルやオタマジャクシやタニシを見つけ、園に持ち帰ってケース(直径 15×15)に入れ、棚の上に置く。 「ほーらカエルよ」と言って、抱っこして棚の上の カエルをいっしょに見る。 テラスにケースを持って出て「さぁみんな見て。オタマジャクシやカエルが出てくるよ」と言いながら皿に出す。 カエルを手に乗せ、Ｈ子の前に持っていき、Ｈ子の様子を見守る。 「Ｈちゃん、カエルよ。マンマじゃないよ」「カエル触れたね」「今度はオタマジャクシよ。カエルの赤ちゃんよ」と言って、テラスに誘う。
７月	テラスの友達の声に誘われて、テラスに出る。 シャボン玉を見つけ、飛んでいる様子を目で追う。 保育者と目が合う。 じっとみる。シャボン玉が目の前で割れると、まばたきをする。 シャボン玉が膨らむのをじっと見る。 飛んでいくシャボン玉を手で取ろうとする。 目を細め飛んでいく様子を見る。 まわりの友達は飛んだりつかまえたりするが、関係なくキュビー人形で遊び始める。	シャボン玉をテラスで吹く。 「何だろうね」「シャボン玉かな」「飛んでいる。あっ、あそこ。きれいね」と言葉をかける。 目の前で大きなシャボン玉を膨らませる。 もう一度膨らます。 大きく膨らんで、跳んでいく。 小さいシャボン玉を数多く膨らます。
８月	保育者の傍に来て、ホースの口に手をかざし、流れ落ちる水が手にあたるのを喜ぶ。 いやがって、降ろしてくれとせがむ。保育者と一緒に水着に着替える。 大きめのスプーンで水をすくったり、ジョロで水を流したりする。フルイを水につけたりあげたりする。おもちゃの水車にジョロで水を流し、水車が回る様子を見る。 片手なべで水を汲んだりながしたりして楽しむ。 びっくりするが、腕に水がかかるのは平気でる。夢中になって水遊びを楽しむ。 片付けを泣いていやがる。	タライにホースで水を入れる。 「Ｈちゃん、水着に着替えてから遊ぼう」と言って抱きかかえる。 「ジャー」と言いながら、水を汲んだり流したりして遊ぶ。 背中や腕に水をかける。 「Ｈちゃん、もうそろそろあがろうやあ。また明日」と声をかける。 抱いてシャワーを浴び、着替えさせる。
９月	種をじっと見る。 Ａ子がＨ子の手のひらの種を取る。 指で種をつまもうとするができない。 種をじっと見る。てのひらから種が地面に落ちる。落ちた種をじっと見て、他の方へ行く。	フウセンカズラの袋を取り、Ｈ子の目の前で袋を破って中の種を見せ、Ｈ子の手のひらに種を置き、「フウセンカズラの種よ」と知らせる。 「種取られてしもうたな。もう一個あげようか」と言って、もう一度フウセンカズラの袋を取り、種を開いて、手のひらに「フウセンカズラの種よ」と言って置く。
１０月	友達がしていても関心がなく、スベリ台で遊ぶ。 保育者といっしょにプランターの所に行く。 こわごわ土を触るが、指で少し穴を開け種を入れてもらい保育者といっしょに土をかける。 友達が水やりをするのをじっと見て、友達のまわりをウロウロする。 ジョロを受け取り水をやる。	二十日大根を植えることを知らせる。 子ども達といっしょに、指で穴を開けその中に二十日大根の種を一粒入れ土をかける。 「Ｈちゃん二十日大根を植えに行こう」と誘う。 保育者といっしょに植える。 「水をあげよう」と言って、ジョロに水を入れ渡す。 Ｈ子に水を入れたジョロを渡す。
１１月	保育者の声かけに無関心で、ブロックで遊ぶ。 友達の「よいしょ！よいしょ！」の声を聞き、プランターの側に来てＡ子の抜いた大根を見る。 名前を呼ばれると急いで保育者の傍に行き、はっぱを持って保育者といっしょに抜こうとする。 大根が抜けて、びっくりする。保育者に渡す。 大根を見ながら「ダイコン、ダイコン」と繰り返し言う。うれしそうに通園バックに二十日大根を入れてもらう。	「二十日大根どうなっているかな？」と言いながらプランターをテラスの上に置く。 「あっ！大きな大根がなっている。抜いてみようか？」と一人一人の名前を呼んでいっしょに抜く。 Ｈ子の名前を呼ぶ。 「ここ持って、よいしょ、よいしょ」と声をかける。 「わぁー抜けたよ。抜けた」といっしょに喜ぶ。 大根を受け取り、「だいこんね」と言う。 「そう、だいこんなぁ」と言う。

12月	木の側に行き、イチョウを見上げる。 S子が保育者から葉っぱをもらうのを見て、保育者の傍に行く。 葉を受け取り、じっと見る。 「はっぱ」と言う。 保育者といっしょに拾う。 葉をバックに入れる。 葉が落ちるのをじっと見る。 牛乳パックのバッグを置いて、本堂の方へ行く。	園外保育で、近くの寺のに行く。大きなイチョウの木を見上げて「おおきい木なぁ」と言う。 「葉っぱが落ちてるよ」と言いながら、イチョウの葉を拾う。 「ハイ」と言って、葉を渡す。 「イチョウの葉っぱよ。きれいなぁ」と言っていっしょに見る。 「あっ、ここにも葉っぱあるよ」と言いながら葉を拾う。 「葉っぱこの中に入れて」と言って、牛乳パックで作ったバッグを渡す。 突然風が吹いてたくさんの葉が落ちる。「わぁーきれい」と言う。
1月	保育者の傍によって来て座る。 「はな」と言いながら花や葉や球根をつまんだりつついたりする。容器の外から下の方を指さす。 「ねっこ」と言ってじっと根の方を見て、また花をつまむ。	「ここにお花咲いているよ」と言いながら、ヒヤシンスの容器を床の上に置く。 H子の前に容器を持っていき「これヒヤシンスという花よ」と言う。 「これは根っこよ」と教える。 「まだ花がたくさん咲くから置いとこうな」と言って元の場所に置く。
2月	突然、大きな声で「くもーくもー」と言いながら保育者の傍に走ってくる。 「くもーくもー」と言いながら空を指さし、見上げる。 友達の所に行き、車で遊ぶ。しばらくしてまた「くもーくもー」と大きな声で言いながら空を見上げる。 額にしわをよせ、いやな顔をする。 しばらく見て、友達の所に行く。	「えっ、なに、くも？くも？」と聞き返し、顔を見る。(虫のクモのことかなと思う) 見上げると、雲がいっぱいだったので「雲ね。雲があったんねえ。そう雲ね、空に雲があるんねえ」とH子の気持を受け止める。 「そう雲ね、Hちゃん、あっちの雲黒いねえ」と言って、H子の見ている方を指さす。
3月	指差した方を見る。鳥が飛んで行くのを見て「とんでいった」と言う。 突然「おはな、おはな」と指さしながら言う。 また、「おはな、おはな」と言う。 池の所に行き、じっと見る。 「こい、こい」と言って、鯉の動きをじっと見る。 「こいさん、こいさん」と言いながら、保育者の真似をする。 保育者の方を見る。 鯉が泳ぐのについて、行ったり来たりする。 鯉を見て、パチパチと手をたたく。 「バイバイ」と言って、鯉に手を振る。	園外保育で近くの寺の池の鯉を見に行く。 途中、畑の木に鳥が止まっているのを見て「あそこに鳥がとまっているよ」と鳥を指さし知らせる。 寺に着く。 「お花どこ？」と言いながら、指さししている方を見る。 「ほんと、あれツバキ言うんよ」と知らせる。 「池についたよ」と言って、子ども達を乳母車から降ろす。 「こい、こい」と言って知らせる。 「大きいなぁ」「あっち行ったな」「こっちへ来たよ」と言う。 「こいさん、こいさん」と言いながら、パチパチと手をたたき鯉を見る。 「こい、来たなぁ」と言う。 「じゃあ、そろそろ鯉さんにバイバイして帰ろう。鯉さん、バイバイまたね」と言う。

が窺える。そして、保育者は小動物や植物や自然現象にH子と一緒にかかわりながら、誘導したり、見守ったり、H子の気持を受け止めたり、共感したり、名称を教えたりしていることがわかる。

3．まとめ

(1) 心の育ち

なかなか園生活に慣れずいつも保育者に抱いてもらえないと泣き、保育者が金魚を見せたり餌をいっしょにやってもかかわろうとせず、カメをミニカー扱いにして遊んだり、カブトムシやセミやヒマワリを怖がるA男の自然とのかかわりの中での心の育ちは、コスモスを見て「はな」「はーな」「これ」と言ったり、広場のアヒルや犬の置物を見て「ワンワン」「ガーガー」と言って小動物や植物に怖がりながらも興味関心と親しみをもち始め、言葉で名称を表現できるようになってきたことと考えられる。このA男の自然とのかかわりの中での心の育ちは、A男が保育者に誘われて保育者といっしょにカメ・カエル・スズムシ・カブトムシ・金魚・ヒマワリ等にかかわったことが大きなきっかけになっていると考えられる。

あまり泣くこともなく園生活に慣れるが、保育者にニワトリやウサギやフウセンカズラを見せてもらってもじっと見ることが多く、虫が近づいて来ると指でつぶすH子の自然のかかわりの中での心の育ちは、保育者の手に乗っているカエルを触ったり、種から蒔いた二十日大根を抜いてびっくりし「ダイコン、ダイコン」と言って感動したり、大きな雲を見つけて「くもーくもー」と大きな声で保育者に伝えようとしたり、鯉を見て保育者のするのを真似て「こいさん、こいさん」と言いながら手をたたいて喜ぶ姿から、小動物や植物や自然現象に興味関心と親しみをもち始め、言葉で名称を言いながら感動や喜びを表現できるようになってきたことと考えられる。このH子の自然とのかかわりの中での心の育ちは、H子が保育者に誘われて保育者と一緒にニワトリ・ウサギ・虫・イチゴ・カエル・フウセンカズラ・二十日大根・イチョウ・ヒヤシンス・鯉等にかかわったことが大きなきっかけになっていると考えられる。

(2) 子どもの心の育ちと保育者のかかわり

①環境構成

保育者は積極的にカメ・カエル・スズムシ・幼虫・カブトムシ・金魚・コスモス・イチゴ・オタマジャクシ・タニシ・フウセンカズラ・二十日大根・ヒヤシンスを飼育栽培し、飼育ケースや植木鉢やプランターを部屋やテラス等の子どもの身近な所に取り入れて、子どもが小動物や植物とかかわる機会をもつように心がけている。また、子どもが園生活に慣れてきた8月頃から、園外保育に出かけ、園外の自然にふれる機会をつくっている。A男の保育者は「スズムシやカブトムシを卵や幼虫から育てた喜びはとても大きく、子ども達以上に小動物に対して関心をもつことができた」[4]と報告している。このように、保育者自身が飼育栽培することに喜びを感じ、興味関心をもち、子どもの身近な所に環境を整えたことが、A男やH子の心が育つきっかけになっていると言えよう。

②いっしょに自然にかかわる

0歳児A男の場合もH子の場合も、保育者は小動物や植物にいっしょにかかわりながら、A男やH子がかかわるように積極的に誘導している。そして、保育者はいっしょにかかわりながら、怖くないことを教えたり、気持を受け止めたり、見守ったり、共感したり、名称を教えたりしている。このように怖がったり、自分からかかわろうとしない0歳児の場合は、保育者がいっしょに自然にかかわりながら積極的に誘導することが重要なポイントになることが指摘できるのではないかと考えられる。

おわりに

倉橋惣三は、教育者自身の生活による誘導の必要性を「生活のもつ動き、力、換言すれば強く生活されていることが、幼児に及ぼすところの誘発的効果こそ、就学前教育法として重要なものである。楽しく踊ることで踊らせ、熱心に製作することで製作させ、幼児をその生活の方へ引き入れて来るものである。しかしこの場合、単に同一生活へ引き入れるばかりでなく、熱心が熱心を、緊張が緊張を、努力が努力を、その内容とは違った方向さえ促してゆくことがある。すなわち、生活性そのものによる生活性の教育である」[5]と述べている。

筆者は先の研究で「子どもの主体性の育ちへの教師のかかわりとしては、“環境構成”と“いっしょに遊ぶ”という教師自身の生活による誘導が大きなポイントであると考えられる」[6]と述べた。同様に、自然とかかわることでの子どもの心の育ちへの保育者のかかわりは、“環境構成”と“いっしょに自然にかかわる”という保育者自身の生活による誘導が大きなポイントと考えられる。

高井弘弥は「トマセロの“9ヶ月の奇跡”より、他者の視点をとることができ、はじめて他者を通じて学ぶことができるようになるのは9ヶ月前後である」[7]と述べ、「同じものを子どもと大人が同時に見る共同注視の現象は、9ヶ月ごろを境にして劇的に変化し、大人が自分と同じものを見ているということに子どもが気づくようになり、また大人と子どもが対面している場面でも大人の目に映る自分を見ることができるようになる」[8]と述べている。本稿では0歳児といっても4月当初生後11ヶ月の子どもの観察記録を中心に考察した。11ヶ月の子どもは、“トマセロの9ヶ月の奇跡”以後の子どもであり、自然を通して保育者と子どもがかかわることができ始めた時期であると考えられる。しかしそれ以前の子ども達の自然とのかかわりについても重要であると考える。今後の課題にしたい。さらに、一歳児の自然とかかわっている場面での観察記録を中心に考察をしたいと思っている。

この研究は、岡山県井笠管内三郡保育協議会の13園の代表保育士と平成10年度から平成13年度にかけて「心が育ち合う保育をめざして－自然とのかかわりを通して－」について研究し、平成13年度岡山県保育研究大会で発表したものを、加筆修正したものである。この研究にあたり、ご協力いただきました三和保育園・敬親保育園・若葉保育園・六条院保育園・竜南保育所・寄島西保育所・里見保育園・矢掛保育園・三谷保育園・中川保育園・小田保育園・芳井保育園・いずみ保育園の先生方に厚く御礼申し上げます。

注

1） 高月教恵「子どもの主体性と教師のかかわり－保育現場における主体性の概念－」新見公立短期大学紀要第18巻 1997 pp.29－39、「子どもの主体性と教師のかかわり(2)－自由遊びにおける行動観察記録を中心に－」新見公立短期大学紀要第19巻 1998 pp.63－74、「子どもの主体性と教師のかかわり(3)－“テーマを共有した遊び”での環境構成を中心に－」新見公立短期大学紀要第20巻 1999 pp.9－23、「子どもの主体性と教師のかかわり(4)－園と家庭との個人的なかかわりを中心に－」新見公立短期大学第22巻 2001 pp.17－26

2） 新村出編「広辞苑」第五版岩波書店 1998 p.950

3） 河合隼雄「ユング心理学入門」培風館 1967 p.47

4） 井笠三郡保育協議会「平成13年度岡山県保育研究大会『心が育ち合う保育をめざして』の資料」2002. p.14

5） 倉橋惣三「倉橋惣三選集第三巻」フレーベル館、昭和40年 p.435

6） (1)の「子どもの主体性と教師のかかわり(2)」に同じ p.74

7） 高井弘弥「０歳と１歳」『年齢の心理学』ミネルヴァ書店 2000 p.29－30

8） 同上書 p.30